

さつまいも（普通）

栽培暦

月	3	4	5	6	7	8	9	10	11
マ									
ルチ									
早									
掘									
り									
種									
芋									
伏									
込									
定									
植									
収									
穫									

マルチ早掘りは、海岸沿いの少雪地、砂土～砂壤土地帯での適用作型（本稿では省略）

栽培の特徴とポイント

発根には15以上が必要で、生育適温は22～25、芋の肥大は地温22～26が適する。土壌pHは、4.2～7.0と広いが、品質面からpH5.0～6.0の範囲とし、pH6以上の場合石灰資材は使用しない。地力のない土地でもよく育ち、連作も可能であるが、地力消耗が激しいので、輪作が望ましい。また、掘り遅れると芋の形状や光沢が低下し商品性が落ちるので出荷時期、労働力に合わせた栽培計画をたてる。

品 種

1 ベニアズマ

- ・萌芽性が良く、育苗は容易。
- ・形は長紡錘形で揃いが良いが、土壌条件によっては形状が乱れ易い。
- ・皮色は濃赤紫で、肉色は黄。粉質で甘味が強く食味がよい。
- ・早植えによる裂開、遅植えによる皮脈の発生が多い。
- ・掘取りが遅れると条溝がやすい。
- ・貯蔵中に粘質になりやすく、貯蔵性はあまり良くない（年内出荷用）。

2 鳴門金時（高系14号の系統選抜）

- ・早期肥大性に優れ（ベニアズマより若干早い）、貯蔵性、収量性が高い。
- ・結着位置が浅くまとまっているので掘取り作業がしやすい。
- ・食味は中程度で形状は短紡で肩が張り易い。
- ・带状粗皮症の発生が見られることや丸いもになり易く、掘り遅れると皮色が悪くなり易い。
- ・萌芽本数が少ないので、種芋がやや多く必要。

育 苗

1 種いも準備

1) 品種別必要量 ベニアズマ：80～100kg / 10a、鳴門金時：100～120kg / 10a

2) 留意事項

- (1) 無病健全で粗皮、裂開等の障害がなく、形や色の良い品種特性を備えた200～300gのいもを選ぶ。
- (2) 特に鳴門金時では、粗皮症状のあるものはウィルス病にかかっているため種いもに利用しない。
- (3) ウィルスフリー - 株を導入した場合は、2～3年ごとに更新する。
- (4) 種いもは遅く植えて遅く掘った若いものが良い。
- (5) 大きいいもほど萌芽は早いですが、不揃いとなるのでなるべく大きさを揃える。

2 床作り

1) 3月上～中旬

2) 苗床面積 8～10㎡（本ば10a当り）

- 3) 苗床肥料 燐加安 5 4 0 を 1 m²当たり 100 g 施用し床土とよく混ぜる。
- 3 種いも消毒
黒斑病等の予防のため 47~48 の温湯に 40 分間浸すか、薬剤浸漬する。
- 4 伏せ込み
1) 伏せ込み時期 3月下旬~4月上旬
伏せ込み後 50 日程度で 1 回目の苗が取れるので、定植時期に合わせて伏せ込みを開始する。
2) 伏せ込み方法
いもの頂部を同じ方向に高さをそろえ、尻部を少し斜め下にしていもの 1/2~1/3 を床土内に入れる。
萌芽の遅い大きいいもは床温の高い中央部に、小さいいもは周辺部にならべ萌芽を揃える。
密植すると苗が細くなり、徒長するので 20cm 程度の間隔に並べる。
3) 管理
発芽まで不織布等で覆い地温を確保する。萌芽後は、種いもが見えなくなる程度に覆土する。
- 5 育苗管理
1) 温度
萌芽適温 30 (200W/坪)。萌芽までの温度が低いと萌芽が遅れるばかりでなく萌芽数が不足し揃いが悪くなるので特に注意する。
萌芽後は昼温 22~25、夜 18 前後で管理し日中の換気を十分行う。床温が 30 以上になると種いもの腐敗が始まるので換気に注意する。採苗 1 週間前(草丈 25cm 頃)からは、被覆資材を取りはずし馴化させる。
2) 水分
床土の水分は 70%程度で管理し乾燥させないように注意する。
3) 病害
苗床で軟腐病、黒斑病、つるわれ病等が発生したときは直ちにいもごと抜き取る。
ムシで菌核病がでる場合があるので換気に注意する。
- 6 採苗
採苗の 3 日前に尿素 1%液を葉面散布すると発根促進効果がある。
苗長が 30~40cm になり、7~8 枚の葉が十分に開いたものを選び 2~3 節残してはさみを使って切る。
採苗は、雨天や早朝を避け、晴れた日の 12~2 時頃に行くと活着が良い苗となる。
採苗後は、床土に追肥(硫安 20g/m²)とかん水を行い、日除けをして次回採苗用の苗の伸長を促す。
採苗回数は 7~10 日おきに 4~5 回行う。

本ば管理

1 施肥

基肥は全面散布後耕起する全層施用とし、条施用しない。また、窒素過多でつるボケさせない。

施肥例 (kg/10a)

肥料の種類	総量	基肥	追肥	成分量		
				N	P	K
(完熟堆肥)注1	(1,000)	(1,000)				
苦土石灰 注2	100	100				
B Mさつまいも専用	60	60		3.0	6.0	7.2
N K化成 E 9 8 9 号 注3	(15)		(15)	2.7	-	2.7
合計				(5.7)	(6.0)	(9.9)

注 1 : 完熟堆肥は、つるぼけや皮色が淡くなるので前作に施用し、当該作では施用しない。

注 2 : 苦土石灰は、pH が 6.0 以上のほ場では施用しない。

注 3 : 追肥 (NK 化成) は、砂土や地力の無いほ場でのみ施用する (活着後、つる伸長前)。但し、マルチ栽培の場合は、B M さつまいも専用 120kg/10a (N:P:K=6:12:14 kg) の基肥全量栽培とする。

2 耕起、畝立て

1) 土壌改良資材散布

苦土石灰、B Mさつまいも専用を全面散布（量は、施肥例を参照）し、できるだけ深く耕起する。

2) 畝立て

かまぼこ型の高い畦（30cm）を作る。特に、鳴門金時は畦が低いと胴太りの丸いも（コロいも）になり易いので注意する。

3) マルチ

普通掘り栽培では、無マルチでも栽培は可能だが、雑草対策や乾燥防止のためマルチ栽培が有効となる。マルチをする場合、植え付け5～7日前にマルチを行い、地温を上げておく（15℃以上）。マルチ下の水分が少ないと、胴太りいもやさめ肌状の表皮異常の発生が多くなるので土壌水分のある内にマルチを行う。マルチと畝面はできるだけ密着させる。

3 定植

1) 時期・・・5月下旬～6月上旬（普通栽培の遅植限界 6月中旬）

2) 栽植方法・・・畝幅 0.9m × 株間 30cm 1条植え = 3,700 株/10a

3) 種芋消毒・・・黒斑病等の予防のため、防除指針により種芋の消毒を実施しておく。

4) 苗予措・・・2～3日冷暗室内に立てかけ、葉柄腋にある根原基が動き始めた頃に植え付ける。

5) 定植方法・・・案内棒で斜め下に畝に穴を空け斜め植えするか、船底植えとし、4～5節土中に差し込む。マルチ栽培では、斜め植えとし、葉焼け防止のため株もとに切りわら等を敷く。埋める節数が多いといもの着生数が多く、少ないと着生数は少ないが肥大性が良い。節は土中に埋めるが、葉は地面から出すようにする。

4 中耕

苗が活着し、伸長を始めたなら直ちに中耕により雑草対策を行う。遅くとも定植後45日～梅雨明けまでには終える。追肥を行う場合は、この時期に同時に行う。マルチ栽培では、中耕の必要は無いが、マルチ間の除草剤散布等で雑草防除する。

5 かん水

1) 植え付け直後・・・葉が枯れるといも付きが悪くなるので、十分かん水し活着を早める。

2) 植え付け後30～40日・・・この間にいもの形状や大きさが決まるので、水不足とならないようスプリンクラ - 等で十分かん水する。

3) 梅雨明け後・・・葉がしおれる場合はスプリンクラ - 等でかん水を行う。但し、収穫が近づくにつれ、かん水は徐々に控える。

6 収穫

1) 実施時期・・・植え付け後100～120日（9月上、中旬頃）に収穫開始となるが、試し掘りにより肥大を確認してから収穫を開始する。この際、M品（200～320g）に達しているいもの有無を目安とする。

2) 茎葉処理・・・掘り取り前につるを刈り取り、マルチを除去後に掘取機等で掘り取る。

3) 方法・・・皮がむけると商品価値が著しく低下するので、表皮に傷をつけないように掘取る。貯蔵用は、降霜前の畑の乾いているとき掘り取る。

4) 洗浄・・・洗浄機を利用し、きれいに土を洗い落とし手直しを行う。洗浄後、直射日光下で乾かすと色が斑（まだら）になるので陰干しにする。

7 調製

1) 粗調製・・・表皮が乾いてから、ひげ根をきれいに取り除く。いもの両端をきれいに切りそろえる。

2) 格別品分別・・・胴太りいも、長形いも、傷いもや病害虫の被害のあるもの、裂開いも等をよりわけ箱詰

めする。日焼け、緑化、奇形、有傷、虫害のあるものを取り除く。

3)箱詰め・・・土や砂が異常に付着しているものを除き、大小区分に従い10kg入り段ボールに入れる。

8 貯蔵

1)通常貯蔵・・・最適温度は12~13℃、湿度80~90%が必要。特に温度は、10℃以下や18℃以上にしない。

2)キュアリング処理・・・収穫時等に生じた傷口にコルク層を形成させ、病原菌の侵入や腐敗を防ぐ処理。
温度33~35℃、湿度90~100%の条件で72時間処理する。その後、通常貯蔵条件で保存する。

病害虫防除

1 黒斑病

主にいもに発生し、いもの表面に直径2~3cmの黒く円い病斑ができる。貯蔵中に発生しやすく、強い苦味が入り食用にならない。苗では、地際や地下部に黒い病斑を形成し、新葉が黄変、枯死する。菌糸は貯蔵いもで越冬する。対策としては、種いも消毒のほか、種いもの貯蔵温度を10℃以下にしない、採苗の際は基部6cm程度を残し切り取る、苗の基部1/3を47~48℃の温湯に15分浸漬する方法がある。

2 コガネムシ類

体長2~4cm白色または黄色のコガネムシ類の幼虫により、いも表面が食害され、その部分がへこみ、多くの場合黒斑病が侵入するため黒変、腐敗する。定植時の越冬幼虫のほか、7月以降に新成虫による加害も発生する。対策としては、定植時や7~8月の薬剤防除のほか、産卵されている可能性の高い、枯草やワラを畝立て時に土中に混ぜ込まない。

3 ハリガネムシ類(マルクビクシコメツキ他)

コメツキ類の幼虫は細長く、堅いためハリガネムシと呼ばれる。この幼虫がいもの内部にむかって針金を突き刺したような食痕を作る。主に発生するマルクビクシコメツキの幼虫は、体長約25mm、体幅1.7mmで光沢のある茶褐色をしている。6~7月に地際に産卵された卵が孵化し、1~3年間幼虫の形態で土中に存在する。対策としては、定植前の薬剤処理の他に、連作しない、寄生しやすいじゃがいも、かぶ類、にんじん、麦類の跡作を避ける。

生理障害による奇形いも等

1 尻細、尻太いも

尻細いもは、作土が浅い場合や多湿により発生しやすく、尻太いもは、生育初期の生育不良によることが多い。防止策として、尻細、尻太とも深耕し、排水性を良くする。

2 さめ肌(いも表面がざらざらする)

原因はホウ素の吸収阻害で、高温・乾燥条件や多肥(窒素、カリ)のほか、多石灰でも発生を助長する。対策として、適正な肥培管理とホウ素の施用がある。

3 毛穴が深くなる(カルシウム欠乏)

高温・乾燥によるカルシウムの吸収阻害で発生しやすい。

販売のポイント

1 9~10月中心の収穫となるので、長期出荷を行うには、キュアリング処理を取り入れた貯蔵出荷を行う。

2 需要の多いL、M規格中心の出荷を行うとともに、胴太り、長形いも等の形状選別をしっかりと行う。